

旧惣構堀

現在の旧惣構堀

慶長4年(1599)、二代藩主・前田利長は、高山右近に命じて金沢城防備のため東西の内惣構堀を、さらに慶長15年(1610)、三代藩主・利常も同様の目的で篠原出羽守一孝に命じて東西の外惣構堀を造った。当時はどの堀も城側に土塁を盛り、竹藪を配していた。そして、惣構煎・惣構橋番人などの町役人がいて、堀中にゴミを捨てること、土塁を崩すこと、竹木を伐採することを禁じていた。



加賀国金沢之絵図
(金沢市立玉川図書館所蔵)



金沢用水めぐり

～保全用水と旧惣構堀～

西内惣構堀 (辰巳用水の一部、母衣町川)

金谷門あたりから金谷出丸(尾山神社前通り)を通り、近江町・旧新町を巡り、旧母衣町(彦三町・尾張町)から浅野川へ流れていた。
延長/約1.6km 幅/約0.6~1.8m



西外惣構堀 (鞍月用水及び辰巳用水の一部)

金沢市立中村記念美術館北側(本多家屋敷内の崖下)より始まり、香林坊・長町を経て、東別院裏で2方向に分水、浅野川へ流れ込んでいた。金沢市役所裏には、ケヤキの古木と土塁にわずかな面影を残している。
延長/約2.8km 幅/約1.5~3.6m



東内惣構堀 (九人橋川)

旧小尻谷町(東兼六町)あたりから始まり、旧味噌蔵町、橋場町を巡り、主計町に至り浅野川へ注いでいた。橋場町交差点にある枯木橋付近には、高さ4mの升形の土塁と惣構門があり、これより城内とされていた。
延長/約1.3km 幅/約0.9~3.6m



東外惣構堀 (源太郎川の一部)

八坂付近の霞ヶ滝が起点で、すぐに源太郎川に合流。材木町の西側を通り、浅野川へ注いでいた。
延長/約1.4km 幅/約2.0~4.5m



参考文献:「金沢・町物語」(高室信一著)、「北の城下町・金沢」(加賀百万石)(ともに田中喜男著)、「金沢市歴史のまちるべ案内」(金沢の用水・こぼし報告書前編)(ともに金沢市教育委員会編)、「辰巳用水にみる先人の匠」(青木治夫著)、「金沢城」(森栄松著)、「金沢用水散歩」(笹倉信行著)

用水に関するお問い合わせは
金沢市用水・みち筋整備課

〒920-8577 金沢市広坂1-1-1
TEL 076-220-2310

※このパンフレットは再生紙を使用しています。

(平成16年作成)

鞍月用水



大野庄用水



辰巳用水



金沢の用水網

市の中心部を流れる犀川・浅野川を源とする用水は、平野部に網の目のように張りめぐらされており、その数は55、総延長は約150kmにも及びます。



保全指定用水一覧 (指定年順)

- 辰巳用水 (下流部は旧西外・内惣構堀)
- 鞍月用水 (一部、旧西外惣構堀)
- 大野庄用水
- 寺津用水
- 泉用水
- 中村高富用水
- 長坂用水
- 小橋用水
- 中島用水
- 金浦用水
- 旭用水
- 九人橋川 (旧東内惣構堀)
- 母衣町川 (旧西内惣構堀)
- 源太郎川 (一部、旧東外惣構堀)
- 勘太郎川
- 小坂用水
- 樋保用水
- 大桑用水

地図中の赤字及び赤色区間は保全指定用水で、用水保全基準が定められています。

浅野川から取水している用水

こばし 小橋用水



【延長】 約3.9km
 【完成年】 元禄年間 (1688~1704)
 【成り立ち】 元禄元年(1688)、城下町の防衛・都市用水の目的で築造されたと思われる。かつては、浅野川小橋上流30m付近に、竹製の蛇籠に石を詰めて造った瀬木を設け、杭を打ち石を入れた沈床(別名ドンドコ)を造っていた。しかし、浅野川が増水するとその沈床は壊れ、そのたびに復旧していたという。昭和35年(1960)頃からは固定堰となり、昭和57年(1982)に小橋下に可動堰が設置され、中島用水と共用堰とした。なお、旧水車町(小橋町・元町)では、昭和初期頃まで、菜種油製造や精米・製粉のため水車が多数存在していた。
 【現在】 元町第三児童公園に設けられた木製水車が、当時の様子をしのばせている。また、近辺の遊歩道で散歩を楽しむ人の姿が見られる。流れはその後、高柳・田中地区の水田地帯を通り、浅野川支流・大宮川に注いでいる。

かなうら 金浦用水

【延長】 約4.4km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 藩政期~明治中期に旧金浦郷と呼ばれた地域一帯を潤していたことから名づけられた。
 【現在】 浅野川上中ゆずの橋の下流右岸地点から取水している。取入口付近の銚子町地内では、民家の庭先に鑑賞用の水車を見ることができる。その後も、ところどころに土蔵がある農村風景の中をゆったりと流れている。



なかじま 中島用水

【延長】 約5.3km
 【完成年】 元禄11年(1698)
 【成り立ち】 藩が現在の位置より下流の旧中島町(昌永町・京町)の岸から取水して完成。取入口の町名から名づけられた。築造目的や取入口の形、用水風景などは、小橋用水に類似していたという。
 【現在】 浅野川小橋の下流右岸地点から取水している。市街地ではほとんど暗きよで、やがて沖町・磯部町などを潤す農業用水に姿を変える。その後、浅野川支流・大宮川に注いでいる。



あさひ 旭用水



【延長】 約4.1km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 小立野台地沿いで浅野川左岸から取水している唯一の用水で、旭町に通じていることからその名がついた。かつては牛坂村だったことから牛坂用水とも呼ばれていた。その途中の鶴間坂一帯は竹藪や林となっていて、藩政期に風雅を好む人たちが集ったといわれ、坂上からの眺望はよかったという。また、その中腹には、清らかな水が湧く旭清水があり、周辺民家の飲料水として重宝がられていた。昭和30年(1955)頃に枯れたが、今も湧き口跡が残っている。
 【現在】 浅野川下田上橋の上流左岸地点から取水している。石積みの護岸や洗い場とともに、水面にかかる花や緑が見られ、背後の段丘の緑とあいまって、風情ある景観を醸し出している。

その他の用水

げんたろうがわ 源太郎川

【延長】 約2.0km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 名前の由来は不詳。ただ、辰巳用水が造られた時、その分水が流れ込んでいたため水量は豊富で、小立野台地から下の木曾谷へ落ちる水の音はとても激しかったという。辺りに轟くような大きさがだったことから、その地の橋や町の名前が「どどめき橋」「百々女木町」と名づけられた。
 【現在】 金沢大学医学部の北西部辺りから自然発生した水は、それから急な木曾坂沿いを駆け下っていく。この流れの存在により、木曾谷と呼ばれている宝円寺周辺(宝町)は、まるで溪谷のような風情がある。やがて寺院群を縫うようにして山裾を流れ、途中、東外惣構堀と合流し、最後は浅野川へ注いでいる。



かんとらうがわ 勘太郎川

【延長】 約1.4km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 辰巳用水の分流で、石引町地内に、かつて勘太郎という人物が住居していたことから名がついたといわれているが定かではない。戦後まで、旧百姓町(幸町)・鱗町・本多町などには、水車を動力源にして製糸業、精錬業、精米・製粉業を営む家が多数あった。
 【現在】 豊富な水が自然に湧き出ている大清水(笠舞)と辰巳用水の分水などが合わさり、流れを形成。その後、小立野台地下の住宅や木立の間をゆるやかに流れている。高い石垣やアーチ型のずい道、洗い場跡が残るなど、白山坂から二十人坂あたりには、市街地とは思えないようなのどかな風景が広がっている。流末は、思案橋の近く(鱗町交差点)で鞍月用水に合流している。



こさか 小坂用水

【延長】 約1.6km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 流域一帯が、奈良末期には「小坂郷」、鎌倉期には「荘園」小坂荘であったことから、当時何らかの形で用水があったものと推測されるが、詳細は不明である。なお文化年間(1804~18)における小坂村では、米のほか大麦・小麦・菜種などを生産していたとの記録がある。
 【現在】 金腐川右岸から取水している。御所町から小坂町にかけて、洗い場など農家の風情が残る街並みや、野間神社前の緑豊かな風情の中を流れている。



犀川から取水している用水

辰巳用水



【延長】 約16.5km (近江町用水、高岡町排水路区間を含む)
 【完成年】 寛永9年(1632)
 【成り立ち】 寛永8年(1631)の法船寺の大火は、城下を焼きつくし城内の殿閣をも焼失させた。これがきっかけとなり、翌年、三代藩主・利常の命で板屋兵四郎が完成させたといわれている。これにより城内の飲料水を供給するとともに、金沢城周辺の空堀を水濠にすることができた。当時、幕府との関係が緊張状態にあったことから、防衛上の観点を重視して造られたとみる向きが強い。約4kmのずい道(現存)を使い、当時の最先端技術を駆使して、難工事を一年足らずで終えたという。当時は木管を使用していたが、藩政時代後期に石管に取り替えられた。その石管が掘り出され、石川県立歴史博物館外や金沢神社敷地内などに置かれている。また、大正期には、水路の一部に水力発電施設を設けて発電したり、大正・昭和初期にかけては、小立野地区の民家・商家では水車を設けて、野菜を洗ったり精米したりしていたという。



【現在】 犀川上流右岸、上辰巳町の東岩地点で取水している。兼六園の曲水の主要な水源として利用されていることは有名。また、広坂通りでは鯉が放流(4月上旬~11月上旬)されている。さらに、大道割~錦町の約2km区間では自然豊かな辰巳用水遊歩道(平成5年完成)が整備され、市民に親しまれている。

鞍月用水

【延長】 約14.6km
 【完成年】 正保年間(1644~48)
 【成り立ち】 名前の由来は、鎌倉時代から室町時代に存在した鞍月庄にもとづいている。藩政初期の正保年間(1644~48)に改修されたという記録が残っているが、いつ頃から流れているのかは定かではない。水力を利用して菜種油を採る目的や灌漑用に造られたらしいが、当初は水量も少なかったため、犀川に堰(油瀬木の名が残る)を設け水量を豊富にしたと伝えられている。その後、一部区間は金沢城の外堀(西外惣構堀)に利用された。明治に入ると、油車町周辺では油絞りに代わり、精米・製粉用の水車が増加。昭和初期までその姿が多数見られたという。また、里見町と柿木島の境には、用水を利用して軍用の旗や指物を染めていた茜屋があり、橋名の由来となった。さらに明治~大正期に、中央小学校付近では、当時全国第二の規模を誇った金沢製糸場の原動力として利用されていた。その後も、燃糸・機業・精練業など近代工業に不可欠な存在だった。旧戸板村・旧鞍月村・旧弓取村を灌漑している。



【現在】 犀川上菊橋の上流右岸、城南2丁目地点で取水している。平成5年、柿木島界隈では開きよ化・ポケットパーク整備が完了し、平成11年、香林坊~高岡町間で、開きよ化・私有橋の整理が行われるなど中心市街地に潤いとにぎわいがよみがえりつつある。

大野庄用水

【延長】 約10.2km
 【完成年】 天正年間(1573~92)
 【成り立ち】 金沢で最も古い用水で、二代藩主・利長の家臣富永佐太郎によって完成したと伝えられている。灌漑、物資運搬、防火、防御、融雪などの多目的用水だが、金沢城築城に大きな役割を果たしたと伝えられている。旧宮腰(金石港)から大量の木材を運ぶために造られたことから、御荷川(または鬼川)と呼ばれていた。ちなみに、当時、木倉町には木材集積所や材木蔵があり、ここで資材を荷揚げし貯えていたと思われる。旧戸板村・旧鞍月村・旧大野村・旧金石町を灌漑している。



【現在】 犀川桜橋の上流右岸地点で取水している。長町武家屋敷周辺では土堀扱いの流れ、その流れは今でも屋敷内庭園の曲水に利用され、時折、ホタルも見かけられる。また用水沿いの縁台に鉢植えを飾っている家もあり、その風情は金沢の伝統景観そのものである。

寺津用水

【延長】 約10.7km
 【完成年】 寛文5年(1665)
 【成り立ち】 正保3年(1646)、浪人・田中覚兵衛が藩に言上し、その後、寛文4年(1664)に改作奉行の指揮の下で工事が始められ、翌年完成した。現在の末町・土清水町辺りの台地を灌漑するために造られた用水で、犀川最上流に位置し、辰巳用水以上に長いずい道(現存)を通っているのが特徴である。明治33年(1900)、用水の水を利用した金沢市最初の発電所・辰巳発電所が完成し、送電を開始。その後昭和46年(1971)、金沢市営の新辰巳発電所が完成し、営業運転を始めた。また、昭和5年(1930)以降、金沢市内の上水道としても利用されている。
 【現在】 犀川上流の犀川ダム下流右岸で取水している。末町から館町地区の山すそを巻くように流れている。周辺には豊かな自然が残されており、用水沿いには遊歩道が整備されている。



泉用水

【延長】 約2.8km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 開削の記録は宝永2年(1705)までさかのぼるが、それ以前は不明の農業用水で、旧米丸村増泉、旧三馬村泉・西泉の田畑を潤していたと伝えられている。
 【現在】 犀川下菊橋の下流左岸地点から取水している。室生犀星ゆかりの雨宝院周辺では、歴史を感じる水路ずい道坑門や護岸があり、にし茶屋街近くでは、一橋ごとにデザインの違いが架けられている。その後は、本流・支流とも細かく枝分かれして町なかを流れ、最後はほとんどが増泉川に流れ込んでいる。



樋俣用水

【延長】 約3.7km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 大野庄用水と同様、元々は自然の川に近い姿だったものが、次第に用水として整備されてきたものと推測される。藩政時代には木曳川と同様に、木材を木揚場まで運ぶ水上輸送路として利用されたという。大野庄用水の分水の中でも特に大きい灌漑区域を有している。
 【現在】 鞍月用水と大野庄用水の合流地点である「木揚場」の下流側で取水している。長田小学校沿いでは、長田菅原神社境内の樹木が緑陰を与え、潤いのある景観が見られる。金石街道沿いで2つに分水し、道路の両側に沿って流れ、藤江、松村や畝田地内などの水田を潤している。



長坂用水

【延長】 約7.4km
 【完成年】 寛文11年(1671)
 【成り立ち】 寛文7年(1667)、旧泉野村など寺町台地一帯の灌漑を目的として、藩命の下で着工。犀川支流内川の大淵割岩付近を水源とし、4年後に完成した。これにより、長坂新村(長坂・長坂台)の開村や、泉野村の米作が可能になった。なお、昭和48年(1973)、新内川ダムと上水道導水路が完成し、水路が約4km近く短縮された。
 【現在】 上流部の内川地区では竹林を縫うように流れ、自然のままの形をとどめている。その後、野田山墓地・大乗寺丘陵総合公園(仮称)周辺を通り、幾筋にも分かれて流れている。



中村高畠用水

【延長】 約4.5km
 【完成年】 天正年間(1573~92)
 【成り立ち】 藩政初期からある農業用水で、もともとは中村用水・高畠用水と別の流れだったが、大正7年(1918)、取入口が1つになり、現在の名称になった。
 【現在】 犀川桜橋の上流左岸地点から取水している。玉鉾用水・入江用水・糸田用水・東力用水といくつにも分流し、犀川~伏見川間の一帯を潤す重要な役割を果たしている。なお、神田神社そばの神田第一児童公園には用水の水が引き込まれ、子どもたちが遊べるようになっている。



大桑用水

【延長】 約4.5km
 【完成年】 不明
 【成り立ち】 大桑郷が開かれた平安期以前より流れていると伝えられているが、現在の流れを指しているかは不明である。また、現在の大桑用水にはずい道区間が見られるが、堀削時期は辰巳用水や長坂用水と同時期以降と考えられることから、現在の流れは藩政時代以降ではないかと推測される。
 【現在】 犀川上流左岸の別所町地内で取水している。田園風景の中を昔ながらの素堀りのままで流れ、大桑貝殻橋付近では素堀りずい道の坑口を間近に見ることができる。洗い場が随所に見られる大桑町の集落を通り、流末は犀川緑地沿いを経て、犀川に注いでいる。

